



財務部 市民税課

主事 松村 菜々子

【派遣先】

石巻市 建設部 建築課

派遣初日から突きつけられた被災地の現実



建築課の窓口

着任後まもなく、窓口に一人の女性がやってきました。話を伺うと、震災後もなんとか住んできたアパートが取り壊されることになったため、今から空いている仮設住宅に入りたいとのこと。しかしながら、仮設住宅への入居資格を持つのは6月25日までに申請をした方のみのため、この女性は仮設住宅へ入居することはできない旨を伝えました。すると女性は「それは私に死ねという意味ですか。」と涙声で訴えました。私は、自分の目の前にいるこの女性が明日住むための家を探すその姿から、被災地で生活する一人ひとりが必死に生きる現実を目の当たりにし、派遣初日から業務の厳しさと難しさを痛感しました。

仮設住宅業務におけるジレンマ

派遣期間中における市内仮設住宅の主な入居あっせん先は、郊外の「河南」「河北」「桃生」地域と、旧市内にやや近い地域の十数戸。10月14日時点でまだ400戸強の仮設住宅が未入居でした。派遣時点では公募抽選はすべて終了しており、随時募集のみを行っていましたが、残念なことに、仮設住宅に当選していたにも関わらず入居権利を放棄してしまう方もいました。またその一方で、前述の女性のように仮設住宅に入居したくてもできない方もいます。この相反する現状がとても苦しかったです。



国内外からの応援メッセージが庁内各所に貼られていた

「ありがとう」の言葉の重み

土地勘が全くない場所で仮設住宅の案内。不安感に押されるように、まるで入庁したばかりの頃のように暇さえあれば資料や市内地図を見て勉強しました。そんな中「遠いところからわざわざ来てくれてありがとう。皆さんが頑張ってくれているんだから、あたし達も頑張らないとね。」と言葉をかけてくださる方。この未曾有の大震災が奪った人々の幸せな日常の尊さを思うと、その心境は計り知れないものがあると思いますが、懸命に立ち上がろうとする被災者の想いが逆に私を勇気づけ励ましてくれました。



第28陣派遣職員と



7ヶ月が経過しても震災の悲惨さを残した女川町役場



がれきの撤去は大分進んだががれきの山は増える一方



家の土台のみが残る場所に言葉が出なかった



復興への誓い

派遣を振り返って

仮設住宅業務に携わる中で、住む場所が当たり前にあるということの意味を強く感じました。津波で多くの家が流されてしまった今、仮設住宅は被災者が次の一步を踏み出すための居場所であり、そのための住宅環境を迅速に整備していくことが復興には不可欠です。今回の東日本大震災のように被害が大きければ大きいほど、被害・復旧状況や被災者を取り巻く住環境を的確に把握して行政事務を執行していくべきだと考えます。石巻市をはじめとするすべての被災地の復興と、被災者の方が1日でも早くかつての日常を取り戻せるよう、祈ってやみません。



企画部 企画経営課

副主査 戸井田 信彦

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

南浜・門脇地区の様子～震災7ヶ月後～



日和山から見た門脇地区

海岸から600m程離れた南浜地区はおおよそ15,000世帯あったそうですが、隣接の門脇地区と同様に津波により住宅など建築物はほとんど流され、壊滅的な被害を受けてしまいました。震災発生後7ヶ月を過ぎた頃の様子は、広範囲で発生した地盤沈下の影響で、市立病院周辺など依然と水が引かない所も多数ありました。また、舗装された道路以外は、汚泥が堆積しており、とても歩ける状況にありません。震災直後に比べれば、がれき等がだいぶ片付けられ、一部道路の舗装も行われ、工事関係車両が多く通行しており、復興への動きを感じることもできました。



がれきが取り除かれた南浜・門脇地区



市立病院周辺



かさ上げしている道路（門脇地区）



市立病院付近

通常業務の負担軽減に向けて

石巻市建築指導課では、災害救助法に基づく住宅の応急修理制度の事務手続を行っていました。着任時には11,000件を超える申請があり、事務処理が完了していないものが、まだ5,000件程ありました。

第30陣派遣当時は、修理制度で窓口に来る件数は1日で10件～20件くらいとなる一方、建築確認申請や開発許可手続など通常業務の相談や手続が増えてきたようで、事務職の行政支援職員ではフォローできないことも多く、市職員の負担も過大になり、現に体調を崩し療養している職員もいたそうです。

そうした中、派遣職員として何ができるのか、どうすれば負担を軽減することができるのかをいつも考え行動するよう心がけました。具体的には、積極的に電話に出る、相手の用件を的確に理解し職員につなげる、また、市職員とのコミュニケーションを大切にしてきました。また、第30陣として、資料の簡素化、業務マニュアルの見直しを行い、制度運用にあたって、効率的な受付・審査業務ができるよう業務改善提案を行ってきました。



がんばろう石巻



日和山から見た中瀬地区



延焼した門脇小学校



中瀬地区の自由の女神像

派遣を振り返って

行政事務支援として、被災者でもある市職員の業務負担を少しでも軽くしたいという思いで業務に取り組み、第30陣として業務マニュアルの見直しと業務改善提案を行いました。一人でできるものでなく、改めてコミュニケーション・チームワークの大切さを教えられました。日常業務もこうしたことの積み重ねの上に成り立っているはずであり、ある業務においてもたくさんの人が関わり、多くの協力があることを忘れずに取り組むことが大切だと思います。また、最後に被災された方々のお見舞いを申し上げるとともに、一日も早い復興・再建を応援しています。



教育総務部 教育施設課

主事 戸澤 百莉子

【派遣先】

石巻市 建設部 建築課

仮設住宅の住居状況

旧市内に建設された仮設住宅は、通勤・通学の関係や高齢者も交通手段がない等の理由によりキャンセルが目立っていました。特に桃生、次いで河北、河南地区の仮設住宅は空きが多く、この空室が空室を呼び、6月25日までに申請が間に合わず入居を希望しているのに入居できない方の不満に繋がるトラブルも生んでいました。宮城県構想で被害の再発を防ぐため沿岸部を避け高台に建設したことが入居状況の悪循環を生んでいました。



ハウスメーカーが建てた仮設住宅

仮設住宅の住環境

仮設住宅の建設は各社同一料金で請負われていますが、構造、断熱性能、仕様は各社様々でした。某ハウスメーカーによる仮設住宅などは木製の階段やスロープでエントランスが造られているものや、外装もサイディングやかなりポップな配色の物もありました。仮設住宅によっては、隙間風や断熱性が低い住宅もあり、ちょうど外壁に断熱材を増す工事を行っていました。



空室が目立っている



外壁の上から断熱材を貼る様子

石巻市の様子

石巻市の復興の状況は隣接町に比べて進んでいるように感じましたが、今も建物や道路には地震・津波の爪痕が残っていて、この光景は、漫画ロードという商店街を抜け北上川に近づくほど色濃くなっていきました。川沿いには打ち上げられた船が残っていたり、橋桁が壊れたままの橋が使用されています。さらに車で走り市街地を抜けると、状況は悪く道路が陥没していたり建物も倒れたままになっていたりとまだまだ手が必要な様子でした。今回の震災では消防隊や自衛隊、海外からの軍、多くのボランティア団体の支援により街が復興に向かっていることに、地元の方々からはどこへ行っても感謝の言葉をいただきました。10月11日をもって避難所は閉鎖されていますが、一部の避難所ではボランティア団体と行政との考え方の相違からトラブルも起きたそうです。

大川小学校

全校生徒108人のうち70人余りが一瞬にして命を落とした小学校があります。市内にはこの外にも沿岸部に近い門脇小学校などがありますが、大川小学校の被害はそれと比べても大きなものでした。大川小学校のすぐ裏には山があり、そこに避難をすれば良かったものの、管理職が不在で指示が遅れたため生徒を校庭に長時間待機させてしまったこと、学校が津波の避難場所に指定されていたこと、大川小学校には屋上がなかったこと等、先生方の判断を悩ませる要素がたくさんあったことが、大きな被害を起こしてしまった原因だと言われています。正門の前には献花台が用意されていました。私が最初にここを訪れたのは夜で、真っ暗で何も見えなかったのですが、花の香りが強く香っていました。翌日、日中に訪れてみると保護者の方々が献花に訪れ思い出の品で溢れていました。市内のどこの献花台よりもきれいであり、その様子から保護者の思いを強く感じられました。



大きな被害を受けた大川小学校



大川小学校校庭に設置された献花台

派遣を振り返って

被災した土地を踏み、被災した方々と出会うという現地での体験によって、自分の中に残っていた、どこかリアリティを持てなかった感覚が吹き飛ばされたように思います。被災地は、怖いほど静かで、海風が強く独特のにおいと空気がまとっていました。この光景はよく夏になると見る原爆投下後の広島や長崎の写真と重なり無彩色の世界は私にとってはかなりショックなもので、写真に撮ることが恐ろしく感じられる瞬間もありました。また、現地ではたくさんの方と出会いました。被災された地元の方や職員、ボランティアの方、そして一緒に派遣された神奈川県内の職員の方、その方々との何気ない会話の中から様々な体験を伺う事ができ、大変勉強になりました。現地での業務では、実際に茅ヶ崎市が直面している課題（市庁舎のあり方、小中学校の避難所のあり方や施設の整備方法など）を改めて考えさせられました。仮設住宅入居希望者への平等な対応、市役所と支所との綿密な連絡体制、課をこえた職員同士の連携等、石巻市が抱えている課題も見受けられました。また、私が業務に携わった8日間という日数ではやっと業務を覚えたところであり、派遣日数をもう少し伸ばした方がよいのではないかと感じました。このようなことが二度と起こらないことを願いますが、災害が起きた際に茅ヶ崎市がどのように混乱を乗り越えていくのかを考えていかなければならないと石巻市の現状を見て強く感じました。



保健福祉部 生活支援課

主事 白井 宏

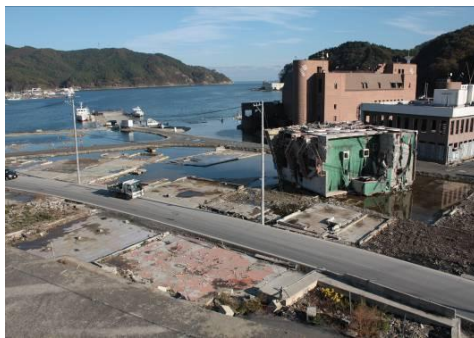
【派遣先】

石巻市 建設部 建築課

視察 日和山～市内・女川町

日和山から見た景色は被災から9ヶ月が経過し、がれきの処理が進んだため、更地のようになっていました。がれきは、1カ所にまとめて積み上げられており、山のようなものでした。悪臭などはしません。がれきの処理や道路の復旧は自衛隊の協力が非常に大きかったと地元の方から話を伺いましたが、復興計画が未完成のため、街として復旧している場所と、そのままになっている場所との差は激しいものがありました。テレビや報道では伝わらない現状があることを痛感し、市の職員である以上は一度は目にする必要性を感じました。

女川町は高台にある病院ですら2m近い津波が来たため、ひどい状況になっていました。現在も潮が満ちてくると、どこからともなく水が湧き出す状況でした。



地盤が沈下し、道路が浸水していた



大火災のあった門脇小学校の教室



石巻市内の様子

女川町の仮設住宅について

土地活用の観点から2、3階建ての仮設住宅が総合公園のグラウンドを利用し建設されました。コミュニティごとの入居なども行ったそうです。近所とのつながりがメリットとデメリットになる場合が考えられます。数年は暮らすことを考えると非常事態とはいえ、立地は重要になってきます。視察当日は、住民と仮設住宅の建築会社、芸能人による復興の催し物が行われていました。小さな町のため、住民同士のつながりが強い様子でお互いに意思疎通を図ることでスムーズな運営がされていると感じました。

石巻市の仮設住宅について

石巻駅周辺では仮設住宅を建てられる場所が限られており、利便性から住民の希望が非常に多かったようです。一方で、仮設住宅の居住確認などの管理業務は進んでおらず、空き家をそのままにしているケースが頻発し苦情も多いようでした。ある程度早期入居を進めることは必要ですが、時間経過に合わせて、管理に力を入れる必要があると感じました。

郊外エリアでは合併により大きくなった市のため、郊外エリアを知らない方も多く、空き家が多い印象を受けました。冬が迫っているため、寒さ対策で暖房器具などを配布していました。現場では日々忙しい様子でしたが、先手で動いていたため、住民からのクレームなどは少ないようでした。求めるものを先に出している効果だと感じました。

応急仮設住宅受付業務

11月11日より仮設住宅の2次募集を行いました。情報発信が十分ではなく問い合わせが多数寄せられました。電話で話を聞く際に、地名が多く出てくるのですが、わからず非常に困りました。大まかな地名や話題にのぼる施設名を先に覚える必要があったため、個人的に情報を確認して地図を作成しました。

応急仮設住宅案内業務

案内の電話では、事前の準備と臨機応変に対応することが重要でした。公平性を保つことを考えれば順番は厳守ですが、1次募集から4ヶ月が経過し、ある程度割り切ってスピード感を持って進めることが大切だと感じました。そこで、「電話した理由」「案内できる物件」「決めないデメリット」を端的に伝えて判断を仰ぐようにしました。市民に伝えるべきことと、伝えなくていいことを切り分けて、スムーズに進める方法を職員が常に考えてやる必要があると感じました。



書き込みをした石巻市内の地図

派遣を振り返って

現地に行き一番印象に残っているのは、被災して家族を亡くしても笑顔で対応している職員の話を聞いた時です。一方で、長期休暇に入っている職員も多い現状でした。果たして自分が同じ立場だったらどう働くかを考えました。公務員は災害時、誰よりも先頭に立つて働く必要があると思います。そういった思いで働いている職員とそうでない職員では、仕事の質や内容が全く異なると感じました。法律に関わる仕事をしていると、それに縛られて大切な時に動けなくなることもあります。しかし、臨機応変な対応が必要なこともあると思いました。現在の相談業務でも同じですが、できないことを考えるのではなく、できる方法を常に模索し続けていこうと思います。



都市部 建築指導課

主任 横田 裕子

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

住宅の応急修理制度の窓口業務



建築指導課窓口業務



建築指導課窓口横にある応援メッセージ

建設部建築指導課にて、住宅の応急修理制度の窓口業務を行いました。休み明けの月曜日は、応急修理の見積り・工事完了報告書を持ってくる方が大勢いました。窓口に来る方は、被災された市民の方、地元業者の方と様々でしたが、多くの方から「わざわざ神奈川県から手伝いにきてくれてありがとう」という感謝の言葉をいただきました。ある業者の方からは、感謝の印にとラベンダーの香りがする手作りオブジェを頂きました。その方は感謝の印を持ち歩き、色々な方にお渡ししているそうです。被災され、大変な思いをしているにも関わらず、こちらの事も気遣ってくださりとても心温まる思いがしました。



←ラベンダーの香りがする工事業業者の方からいただいたもの（手作り）

石巻市役所外周部→
未だに被災跡が残っています



旅館とちぎの現状

派遣期間中は、石巻市役所から徒歩5分の所にある「旅館 とちぎ」に泊まりました。宿のご主人が栃木出身との事で、宮城県なのに「とちぎ」と命名。建物は震災の影響で少し傾いており、震災当日は津波により1m程浸水したそうです。建物内にある大浴場は大破してしまったため、使用不可の状態でした。すぐに改修を行いたいにも関わらず、3月までは業者の手が一杯で未だに修理できない状況との事でした。



一週間お世話になった「旅館 とちぎ」



大浴場の洗い場3月まで工事待ちで修理できないとの事



とちぎの大浴場 地震で使用不可に…



大浴場の窓 建物が傾き窓も閉まりません

派遣を振り返って

応急修理制度業務を行うとの事で、私にできるのかとても不安な思いで石巻市へ向かいました。実際、11月下旬では応急修理制度の業務は大分落ち着いており、建築制限が解除された影響で建築関係の問い合わせの方がとても多い状態でした。石巻市の建築指導課は、茅ヶ崎市の3課分の業務内容を一つの課で行っているにも関わらず、技術職が4人しかいない状態のため職員が休む暇なく働いておりました。私が同じ建築指導課で業務内容が似ている事もあり、本来の支援業務である応急修理業務の他に建築業務を積極的に手伝い、少しは役に立てたのではないかと思います。この被災地派遣により石巻市の職員とつながりを持つことができ、とても良かったです。



都市部 建築指導課

主任 前田 俊明

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

住宅の応急修理制度の窓口業務

住宅の応急修理の申請では、被災直後の住居内の写真が添付されています。申請に来られた居住者の方に写真を基に話を伺いましたが、とても心が痛むものでした。



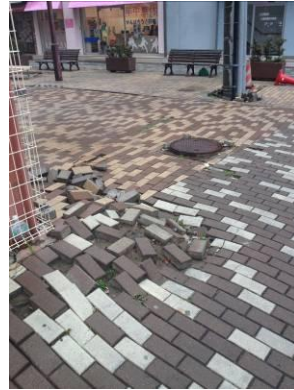
建築指導課

石巻市役所職員



石巻市役所

石巻市役所の職員の皆さんがとても温かく、親切でした。不慣れな環境でも業務に集中することができました。



石巻庁舎周辺の様子

町の復興について

大手たこ焼きチェーンが経営しているホット横丁という商店街に行きました。コンテナハウスを組み合わせてフードコート形態をつくっており、企業としての工夫に感心しました。



ホット横丁

派遣を振り返って

市役所内は多くの臨時職員や派遣、委託業者が入っており、被災事務以外の通常業務が正常な状態ではないと感じました。実際に震災が起こると、復興業務が最優先とされますが、その中で通常の行政を行っていくのは現職員のみなので、その責務は重大と思います。被災業務も状況により、担当課や受付場所が変化しているようです。職員が把握している情報がすでに古いものであったりするような状況が見受けられたので、情報を一本化することはとても重要なことであると思いました。



文化生涯学習部 男女共同参画課
課長補佐 佐藤 勇

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

住宅の応急修理制度受付の様子

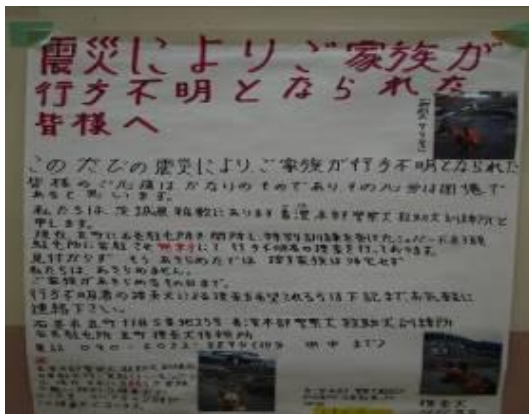


建築指導課前

震災により半壊以上（半壊、半焼、大規模半壊、全壊）の家屋が対象となる住宅の応急修理制度の見積書の受理及び工事完了報告書の受付業務を行いました。来庁者は、修理業者であつたり被災者自身であつたり様々でしたが、修理業者自身も被災しており、仮設住宅で生活しながら、修理の仕事をしているという方も多くいらっしゃいました。

市役所内に貼られていたポスター

このポスターは市役所内数箇所に貼られており、とても印象的だったので写真に残しました。前述の受付業務においても、単に書類のやりとりだけではなく、できるだけお話を聞きながら対応するように心がけました。胸が熱くなってしまうこともしばしばで、今回の震災の被害の大きさと、心の傷が癒えない方々が多くいらっしゃるということを改めて認識し、深く心に刻む機会となりました。



印象深いポスター



第37陣メンバー

鉄骨のみを残した南三陸町防災対策庁舎

第37陣は日曜日が閉庁日であったため、レンタカーで南三陸町まで足を伸ばしました。新聞やTV報道で知ってはいましたが、実際にここの前に立つと言葉が出ませんでした。もし自分があの時同じ立場であったら、最後まで防災無線で住民に避難を呼びかけて亡くなった、南三陸町職員の遠藤未希さんのような行動が取れたのかと自問自答したことが、今回、一番印象に残っています。



3階まで津波が達した庁舎

12月11日 被災から9ヶ月後の大川小学校

まさかここまで津波がくるとは・・・先生も子どもたちもきっとそう思ったことでしょう。写真の左側（左下の写真）に新北上川が流れています。河口より5km離れていた大川小学校では、堤防を乗り越えた津波により、校庭に避難していた児童108人中70人が亡くなり、未だに4人が行方不明となっています。当初の想定では津波被害は河口よりkm程度とされ、大川小学校は避難所に指定されていました。ここで多くの小さな命が一瞬のうちに奪われました。あまりにも苛酷な現実と言葉がありませんでした。



犠牲者を慰霊する母子像が建てられていた



左建物奥にクリスマスツリーが見える

派遣を振り返って

このような未曾有の大災害が起こってしまったときに、行政は何ができるのか。また、事前にどんな準備をすることがより良いことなのか。今回、さまざまな人たちのお話を聞いて、もし「神奈川」で、もし「茅ヶ崎」でと何度も考えました。仙台湾と石巻湾に面し、東に牡鹿半島、市内には一級河川の北上川が流れる石巻市と、相模湾に面し、東に三浦半島、市内には同じく一級河川の相模川が流れる茅ヶ崎市。地形的に通ずるところがあると思いました。災害にはさまざまな形態があり、地震による津波被害だけを特化して論ずるつもりはありませんが、現地を見て、被災者のお話を聞き、一瞬のうちに命を落とされた方の数の多さと、残された人たちの哀しみを思うとき、行政は、まず初動でできることは何かということを考えなくてはならないと思いました。具体的には「いかに迅速に」「できるだけ多くの方を」「安全な場所に」避難させることができるかということです。



保健福祉部 保険年金課
主事 鈴木 トーマス能満
【派遣先】
石巻市 建設部 建築指導課

静寂の中にも震災の爪痕が残る石巻

現地へ向かう新幹線が仙台駅に到着すると、雪が降っていました。電車を乗り継いで石巻へ着いても降っており、聞くと初雪とのことでした。震災から9ヶ月、季節は巡って冬が到来しましたが、翌日の視察で見た石巻の沿岸が見渡せる日和山公園からの風景は、静寂の中にも未だに震災の爪痕が残るなんとも寂しげな光景でした。震災当日も雪で、それは地震発生直後に突然降り出したとのことでした。



日和山公園には神社があった



津波は旧北上川を遡った

高台に逃げることの大切さを改めて知らされる

津波で甚大な被害を受けた門脇町の一角にて車を降りると、今自分が立っている空き地がかつてスーパーマーケットであったと知らされ、津波が町全体を一瞬で消し去ったことを実感させられました。振り返ると、廃墟のような門脇小学校があり、その裏にある高台には家や木々が残っていました。ほんの数mの差で景色が全く違うことに、高台に逃げる重要性を改めて思い知らされました。



高台には家や木々が残っている



この場所はスーパーマーケットがあった

復興は進んでいるのか？疑問に思った現地の状況

被災地から離れた神奈川に住んでいると、震災から9ヶ月経った今では復興もある程度進んでいるかと思っていました。しかし、実際にはがれきもまだ多く残り、現地で行った業務である住宅の応急修理がやっと完了したところであったり、それ以前に現在も全壊や半壊した住居に住んでいてまだ修理の申請段階の市民の方もおられ、復興にはまだまだ時間がかかると言わざるを得ない状況でした。



9ヶ月経っても未だにがれきが残る



船も乗り上げたまま



建物の土台だけが残っている



コンクリートのビルも横倒のまま

「絆」という一言では表せない石巻市民の方の話

「絆」という言葉が話題になった2011年ですが、現地での窓口業務の中で被災者の方からの震災当時の話が大変印象に残りました。様々なお話しをお聞きしましたが、中でも電車に取り残され、車内にいた看護学生が多くの方々を助けてくれて、電車が救護所のような形となったという話を聞いて「絆」という一言では表せない何かを感じました。腕章を付けていた私に、茅ヶ崎から来てくれてありがとうと言ってくださった一言も忘れられません。

派遣を振り返って

1週間という期間は大変短いものでした。業務終了後も一緒に現地に派遣された神奈川県内の他自治体職員といざ震災が起こったらどうするのかについて熱く意見を交換しました。ここまで真剣に考えたのは、正直なところ今回の派遣があったからです。また、被災地での人と人とのつながりの重要性を身にしみて感じました。様々なお話しを聞いて、日頃より、市民の方と行政との連携や信頼関係がなければ、避難所での生活やその後の復興までの道のりに大きな壁ができてしまうのだと実感しました。

そして、個人では震災が起こらないことを前提ではなく、防災用品を用意したり、逃げの高台をあらかじめ決めておいたりすることが本当に、本当に、重要だと伝えたいです。



都市部 建築指導課

主事 笠原 綾

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

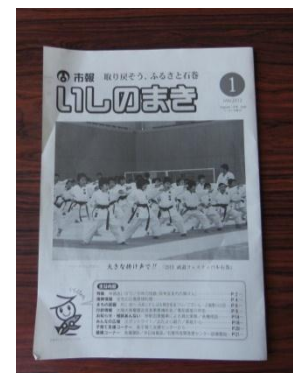
住宅の応急修理制度に関する業務

住宅の応急修理制度とは、震災で半壊以上の被災をした住宅について、災害救助法に基づき、石巻市が業者に依頼して、一定の範囲内で応急修理を行うものです。応急仮設住宅等に入居をせずに、住宅に居住することが制度の対象条件となります。

私は建築指導課の業務の中で住宅の応急修理制度に関する市民からの問い合わせ対応及び期限の周知等を行いました。

市民からの問い合わせ対応

市報「いしのまき」の1月号において、住宅の応急修理制度の申込受付期限が1月31日までであることが掲載されました。派遣期間中の1月20日から27日は申込み期限の間近であったため、問い合わせの電話が多数ありました。中には「震災直後に様々な申請をしたので、応急修理の申請をしたのかどうかわからない。」という問い合わせ等もありました。



市報「いしのまき」1月号

期限等の周知

住宅の応急修理制度は、3月末までに工事が完了できない場合、制度が利用できなくなる可能性があります。しかし、未だに修理を終えていない申請者が多数いたため、応急修理の進捗状況の確認及び期限の周知のために、電話連絡を行いました。

ある高齢の女性は、「業者に修理の依頼はしたけれども、業者が忙しくて未だに工事着手していない。」と話されました。さらに「寒さが厳しくなってきたから、自宅に住むということは諦めて、仮設住宅に住もうかと考えている。」と続けられました。東日本大震災から約10ヶ月が経過しますが、未だに厳しい状況であることを再認識し、胸が詰まりました。

石巻立町復興ふれあい商店街

石巻立町復興ふれあい商店街は、地元の商店街有志の方々等が協力し、昨年末にオープンした仮設の商店街です。石巻駅から徒歩3分の位置にあります。派遣期間中の1月21日には、石巻商工会議所やボランティアの方々により、「復興もちつき大会」が行われており、近所の応急仮設住宅入居者をはじめ地元の方々が集まっていました。

私達が立ち寄ったパン屋では、商品を陳列する棚だけでなく、近所の人が集えるスペースが設けられており、高齢の女性が世間話をしていました。冬は屋外で立ち話しをするのが辛いので、このような場所があることによってリラックスできるのではないかと感じました。

石巻市内の様子

石巻駅周辺は、一見、被災したのがわからないほど平穏な街の印象を受けましたが、よく見ると、亀裂の入った道路や傾いている建築物等が残っていました。実際、駅前近くでお会いした地元の方は「震災時には、駅前でも約1m以上浸水した。」と話していました。

さらに、海岸及び河川沿いに行くと震災の爪痕は深くなり、津波と火災の被害を受けた学校や打ち上げられた船が残っていました。また、建築物等を撤去したがれきの山では、数台のショベルカーが絶えず作業をしていました。



日和山公園より



漁港周辺



石巻市立門脇小学校

派遣を振り返って

市役所の職員の中には、ご家族を亡くされた方、被災した自宅や応急仮設住宅に居住している方等、精神的に辛い思いをされながら勤務している方も多く、震災から10ヶ月が経過し、その方々の疲労がピークにきていることを感じました。それでも、懸命に業務を行っている姿に、同じ行政職員として頭が上がりませんでした。

被災地の状況を目の当たりにして、日頃から大災害へ備えることの重要性を再認識しました。また、実際に震災が起きた際には、市役所の職員が連携し、市民に対しの確な情報提供を行うことが大切だと感じました。

